

戦後民主政治の鬼子となった公明党

平野 貞夫
元参議院議員

1967(昭和42)年1月29日に施行された第31回衆院総選挙で、公明党は25人を当選させ自社55年体制を多党化に向かわせた。それから半世紀が過ぎ何があつたか、ひと言でいえば「権力の腐性」に魅入られての変質である。というのも公明党は「平和・人権・福祉」を党是として、国民の期待を受けての衆院選出だつた。それゆえ公明党の最初の活動は自民党の国会対策費の疑惑追及だつた。にもかかわらず半世紀たつたいまの公明党の立ち位置は大きく様変わりしているからだ。

本編執筆中の2019(令和元)年11月、ほとんどの日本人に政治不信を深めた「安倍晋三首相主催の桜を見る会」私物化疑惑が発覚。問題の日、新宿御苑にセットされたお立ち台に、安倍首相と並んで山口那津男公明党代表が、乾杯の音頭をとっているテレビ映像

の報道を見て私は、半世紀前、反自民の公明党の純情さを思い出し恐怖を感じた。

安倍政権と一緒にあって、平和と人権と福祉の党是をポロポロにした実態を知っている私の頭脳に「戦後民主政治の鬼子となった公明党」との言葉が浮かんできた。「鬼子」とは親の心に逆らつて地獄を彷徨う人間のことだ。

日本政界のタブーを突破した矢野書記長の爆弾質問

第31回衆院総選挙の歴史的意義は、公明党が25人を当選させてそれまでの「自社55年体制」に、どのような政治変化をもたらすかに集中した。第55回特別国会が召集される直前まで、政局の関心は公明党の政治スタンスにあった。佐藤栄作自民政権は中間系の大物石井光次郎を衆院議長に起用して、国会運営の正常化

という国民の期待に応えようとした。

副議長には「黒い霧国会」を乗り切つた前副議長の園田直を留任させ、長期政権への展望を目指すようになる。政治の裏を見た私は、園田副議長秘書を辞めたくて、衆院事務局からの指示に抵抗した。当時、吉田茂元首相の家老職をやっていた私の東京の親代わり依田義賢氏から説得され、続けることになる。実は佐藤首相は、私が吉田元首相と関係があることを早々に承知していた。人事の佐藤といわれるだけあって、末端の人事に気配りしていた。園田副議長の苦勳を私に確認するなど、佐藤政権の手先になることに抵抗感があつた。

世論の大勢は、公明党の政治スタンスを政党の理念から見て、最左派が共産党(5人)、社会党(141人)、民社党(30人)、公明党(25人)、自民党(280人)との見方であつた。政治スタンスは民社党と政権与党自民党の間との判断で、佐藤政権は希望的観測でもってそれを確信していた。それは佐藤首相と池田大作創価学会会長の個人的付き合いにあつた。

ところが、第55回特別国会で総予算が審議される時期となつた3月23日、矢野詢也公明党書記長が、多額

の自民党国会対策費の使途について、佐藤首相に爆弾質問を行った。当時の政治体制は、1955(昭和30)年に保守合同でできた「自由民主党」と、左派・右派の合同による「日本社会党」の二大政党による「自社55体制」で、共産党は3-5人の少数政党で影響が少なかった。

自民党と社会党の二大政党による実質「談合政治」が続けられており、「60年安保国会」を前に社会党右派の一部が離党して「民主社会党」を結成していた。衆院で40人の議席を占めていたが、自民政権には是々非々のスタンスであつた。

矢野書記長の爆弾発言とは、「自民党国会対策費疑惑質問」である。「政界浄化・腐敗政治追放」を目標として、自民党の政治収支報告書に基づき、1965-66(昭和40-41)年に支出された国会対策費の月日と、国会混雑の月日をスライドさせて具体的に追及。その上で「この金が、使で使されている法案の審議や国会運営に何らかの意味があるのか」と、佐藤首相を追及した。

佐藤首相は顔色を変え「幹事長にまかせていることだ。いちいち報告することではないので断る」と拒否

した。矢野書記長は「そんな返事なら新聞や巷の噂は事実と想う」として自民党の支出明細書を資料要求した。あわせて田中伊三次法務大臣に「一般論として国会審議の取引に使われた事実があれば、どんな法的問題になるか」と質した。田中法務大臣は「刑法に関する職務上の取崩罪が成立する」と答弁し、国会は大混乱となった。

この問題は、日本政界のタブーであった。自民党は勿論、さまざまな噂の対象となっていた社会党にとつて深刻な問題で、民社党も同様であった。国民は公明党に政界浄化を期待した。朝日新聞は「最も反体制色を感じさせた」と報道した。そのため、公明党の政治的立場は共産党と連わらないという声や、政策的には民社党と社会党の間か、という見方が大勢となった。

矢野書記長の舌力に過激なものがあつたため、矢野発言は予算委員会議録から削除されたが、要は不都合な真実の隠れいが図られたのだ。『政界浄化』で衆議院のスタートを成功させた公明党であった。

しかし、23年後の1989（平成元）年、「明電工事件」などの政治倫理問題を批判され、矢野氏は公明党委員長を辞職することとなった。歴史とは皮肉なことを中心に激しい抵抗をするため、事務局の委員会担当者には困りについた。

国会では審議での激しい言論での抵抗が筋で、抵抗には限界があることを説明するも理解してくれない。公明党の言い分は「自民党が野党との約束を守らないので、その抵抗だ」と主張する。事務局は「社会や民社と話して抵抗されたい」と言うも、自民党との八百長の抵抗をなかなか理解してくれない。

結局、健康保険特例法案はこの国会で成立が困難となる。会期末になって、石井衆院議員が与野党を説得して「臨時国会を速やかに召集し審議成立させる」といふことになる。次の第56回臨時国会が「健保国会」という大混乱国会となり、当時の事務総長と私で、憲法違反の本会議採決を阻止することになる。これには議会員主政治の本来のあり方を学ぼうと竹入義勝委員長の見識があつた。次号で述べることにする。

防衛二法改正案の審議も大混乱した。これは池田創価学会会長の関与で成立した経緯がある。この改正案のフルネームは「防衛庁設置法及び自衛隊法の一部を改正する法律案」という。内容は防衛体制の強化、すなわち装備や人員の増大である。当時、一国会で成立

ものである。

佐藤首相と池田会長の親交で防衛二法成立

第55回特別国会での矢野公明党書記長の「国会対策費爆弾発言」問題が収拾した後、与野党が激突する重要法案が二つあつた。「健康保険特例法案」と「防衛二法案改正案」である。前者は当時の財政事情の悪化対策として、各種の健康保険料を値上げしようとするもので、国民の負担増に野党はこぞつて厳しく反対した。

従来、紛糾した議事でも社会党も民社党も抵抗するのに一定の合意があつた。委員会の開会を自民党が強行しても、委員長席での物理的抵抗、例えば暴力的に手を出すなどは行わず、いかにも紛糾している形をマスコミやテレビ用に行う程度で、本気の抵抗はしなかつた。ところが公明党は抵抗の加減を知らない。社会党も民社党も矢野書記長の爆弾発言のしこりを残しており、仲間として扱わない時期であつた。

健康保険特例法案を審議する社会労働委員会では、野党の反対を押し切って強行審議する時、公明党は本気で抵抗した。大相模の関取だつた「小浜新次議員」

せず2年ぐらいで成立という法案もあつたが、この法案はもつとも野党の抵抗が強い法案であつた。「平和」を標榜する公明党の抵抗も強く激しく反対した。

佐藤首相にとっては、前年の黒い霧国会で未成立だつたため、成立にこだわつた。團田副議長も腕の見せ所であつた。自民党は審議強行を重ねたが、社会・公明の抵抗は強く、会期末になって成立が難しくなつた。これが突然に成立となるから、国会は魔術不思議なところだ。何が起つたのか。いろいろな動きがあつたが、決定的な証拠を挙げておく。

『佐藤栄作日記』第3巻106ページより
(一九六七年)七月二十日(木)

(十時登庁。国会も明日残すのみとなつたので、最後の勉強を覚悟に指示する。何よりも防衛二法を通過さすこと、その為に大津君(首相秘書官)を創価学会池田会長に連絡をとらす。会長が幸いに引きうけてくれたので一寸安心。又その約束通り議事がとり進ばれた)

佐藤政権は創価学会池田会長を政治的に利用したことを日記に書いているが、公明党はこの時期、議事故治の理解は浅かつた。